

## 『英語を学べばバカになる』

薬師院 仁志 著 (2005)

光文社新書 250pp.

山口 高嶺

早稲田大学 助手

穏やかでないタイトル。英語教育に携わっている人にとっては特にそうだ。『グローバル思考という妄想』という副題の方が本書の内容を表しているタイトルに思える。著者の主な専攻分野は社会学理論，現代社会論，教育社会学。

決して英語学習そのものを否定している書ではない。「個人のためにも国家のためにも世界のためにも英語は重要であり必要」という世間の声は、英語学習熱とアメリカとグローバル化が密接に結びついたものと考え、グローバル思考はアメリカ文化型思考であり、英語を学ぶ中でアメリカ文化型思考に染まりすぎてしまう危険性を、船橋洋一（2000）の主張の類似点と相違点を挙げながら、アメリカとフランスとの相違点を挙げながら、全編を通じて指摘する。

第1章「英語をとりまく状況」では、現在も将来も英語が世界共通語と位置づけられることに具体的な状況を指摘しながら反対している。

第2章「英語支配の虚像」では、英語による「被害者意識」が述べられ、英語を「支配」しているアメリカ時代の終わりを述べている。具体的には、日本人による「英米人と白人との混同」が悲劇を呼んでいる例を紹介し、船橋洋一（2000）の主張の核心「英語支配に屈しないために英語という武器で闘わなければ負けてしまう」ことが述べられている。

第3章「アメリカ妄想」では、フランスの『ミシュラン』とアメリカの『ザガット』を例にしながら、フランスとアメリカのそれぞれの民主主義の違いを挙げる。前者は質の高い限られた専門家のみが判断を下すのに対し、後者は一般大衆も含めた集まった支持の数で判断が下されると言う。この背後にあるのは、ヨーロッパ民主主義は、特権階級が独占している権力などを国民各層に再分配するべきというものであり、信頼のおける専門家が判断するなら多少の権力も受け入れるものであるが、アメリカ民主主義は、エリートと素人の質的な差は存在しないからこそ量や数だけが問題になり、上からの押し付けに対して

警戒感が強いと言う。

例証として、ヨーロッパ的な見方から、なぜアメリカ人は互いをファーストネームで呼び合おうとするのか、なぜインターネットで最も多く使われている言語が英語であるのか、なぜ進化論が現在でもアメリカで議論になっているのか、なぜアメリカが訴訟社会であるのか、なぜ勝ち組と負け組が生まれるのか、なぜアメリカでディベートが盛んなのか、なぜアメリカでは教育が商売になるか、などに対する説明を試み、日本の英語公用語論はアメリカ民主主義的な思想から端を発しており、その証拠に、船橋洋一（2000）の「日本の今後の理解のされ方として、上からの国と国との関係より、下からの自発的な民際関係が主流になり、その言語は英語だ」という発言を挙げている。

学校や大学間の競争を促進することは、学校間格差を広げるが、全体のレベルを向上させることはない、自由競争と客観評価に基づく教育は自己目的化した画一性しか生まない、とまで述べる。AO入試の導入な盛んな日本に対して、アメリカ特有の歴史的事情を無視して猿真似をするのは無意味とも述べる。

第4章「英語学習という徒労」では、日本人の英語ベタの理由は心からの動機と必要性の欠如だと述べ、動機と必要性のない人が英語学習に失敗するのは日本の豊かさの証拠だと言い、外国語の適用度の高い状況は幸せかと問う。また、豊かな環境にある人が英語を身に付けるといふ豊かな日本で英語を能力判断の基準にすることは、上流階級の自己正当化を助長すると述べる。

第5章「グローバル化幻想」において、多文化共生主義は、現実的に押し付けられる側にしては、多文化に共生せよと強制する主義であると述べ、仮に地球上のすべての市民が英語を話すようになれば異文化コミュニケーションなど存在しないだろうが、実際にはローカルな文化からの反撃があるだろうと言う。

アメリカのソフトパワーが今後続くかどうかに関しては、本書だけの分析では一面的なことしか言えないように思われる。また、英語使用の70%が非母語話者同士であるとするデータを踏まえれば、例えばアジアにおける国籍の異なる専門を同一とする者同士の英語に関してほとんど言及がない点にも注意すべきである。国際理解がアメリカだけの理解に留まらず多様な文化を見て自己相対化することであるならば、英語学習だけで世界がわかるなどと誤解させないよう、「なぜ英語を学ぶのか」と問う学習者に答えるためにも読んでおきたい書である。

## 引用文献

船橋洋一（2000）『あえて英語公用語論』．文春新書．